

「ひいっ！♡♡」

両胸の環<sup>わ</sup>を左右から引っ張られながら、正面の男に幼茎の先端をつつかれる。ちよん、と触れられただけで、そこから電気が流れたように下半身が跳ねる。小さな竿はさつき精を放ったことなど忘れたかのように、また芯を持ちはじめていた。

「そもそもこれも仕置きだつてのに……気持ちよくなれたんじゃ、罰にならねえなあ？」

「仕方ない。今日はこれを使おうか」

「ああ……っ！♡♡いやあ……っ！」

幼茎の先端に棒状のものをあてがわれ、躰が反射的に逃げを打つ。

正面にまわり込んできた若い男が少年の尿道口に挿しこもうとしているのは、金属製の細い火箸だった。

二本で一膳<sup>いちぜん</sup>の箸<sup>こうたん</sup>の後端には穴があけられ、ちょうど少年の乳首<sup>はま</sup>に嵌っているような鉄の環で、ばらばらにならぬようひとまとめにされている。

男はそのうちの一本を、あろうことか少年の尿道口から入れ込んでくるのだ。

「ひっ……♡♡」

くちゅり、と音を立て、やわ肉に埋没した、点のような密孔をさぐりあてられ、じんわりと押し込まれる。

もちろん普段使いのもののように<sup>いろり</sup>囲炉裏で熱されているわけではないので熱さはないが、こんなものを竿の内部に入れてよいはずがない。

数ある男たちからの責め苦の中で、この火箸による責めほど少年を苦しめるものはなかった。

「お前が<sup>いけ</sup>不可ないんだよ……。勝手に自慰なんてするから」

「んひいいいい……ツツ♡♡♡」

若い男は言いながら、細い火箸をゆっくりと尿道内に押し込んでくる。

手首を後ろ手に縛られている上、両側から中年男たちに肩を抱くようにされ、逃げることもすらかなわない。

徐々に沈み込んでくる箸の先端は丸く加工されており、形状は真上から見て角丸の正方形だ。しかしいくら丸みを帯びた形をしていても、毎回感じるのはあきらかな異物感でしかない。

「……っあ…♡あ…っ…♡…い…やあ……っ…♡」

尿道内に残った精液が潤滑剤となっているのか、想像以上にすんなり火箸が

沈み込んでくる。

ありえない場所にありえない物を入れられる本能的な恐怖に、全身から<sup>あぶらあせ</sup>脂汗がふきだす。鼓動も警鐘を鳴らすように速まりながら、けれど尿道内は、疼くような感覚を拾い上げはじめてもいた。

「んう…ッ♡あああ……ッ♡」

<sup>こうたん</sup>後端に行くに従い、箸はだんだん太くなっていく。

普段は意識することすらない狭い孔の存在を、無理くり進まれるたびはつきり意識させられるこの感覚が、怖いのに、どこか被虐的な<sup>よろこ</sup>悦びを少年の身に伝える。

「こっちも、しっかり仕置きしてやらんとなあ」

「ひあ”あ…ッ！？♡♡」

そして、そんな状態で乳首の環を引っ張られることほどつらいものはなかった。

さきほど何度も引かれ、すでにジンジンしていた片乳首に、さらなる刺激を与えられ、鋭い悦楽がみぞおちにまで響く。

「いいか？気持ちいいからって……腰を動かすんじゃねえぞ？」

「ひっ♡あっ♡あああ…っ♡♡」

言われながら、もう片方の乳首の環も引っ張られ、左右の環を思い思いに引っ張られる快感に、胴震いしそうなほど感じてしまう。

そうされながらも尿道でじわじわと箸を進められ、もう竿の半分くらいまで箸で埋められている。

「ひい♡♡あ♡、あああ…っっ！♡♡」

上下からの異なる刺激に、ぞくっ♡ぞくっ♡と、くすぐったさにも似た淫樂が背骨を駆ける。あちこち気持ちよくて仕方がない中で、何も啜えるものがない後孔だけが、やけに物寂しく感じる。その感覚を埋めるように、思わず小さな尻を振りたててしまいそうになる。

「うう…っ♡♡あああ……っ♡」

しかし、さっき腰を動かすなど言われたばかりだ。

両乳首をぐいぐい引っ張られ、尿道をヌルヌル進まれる快感に気が遠くなりかけながらも、下半身を動かさないようにするのに必死になる。

もしまた言いつけを守れなかったら、男たちからの責め立てはさらに非道なものになるにきまっている。

「ふん……、よく我慢したな」

「ひあッ！♡♡♡」

若い男は言いながら、とんッ♡と箸のきっさきを尿道の奥深く——終点と思われる場所に当てる。

もはや竿を突き抜け、下腹部の内部に到達した箸の先端。それが、少年の体内でもっとも感じやすい場所をつついているのだ。

「ここは尻側からつついても、すぐ達<sup>い</sup>ちまうよなあ、お前？」

「ひいッ♡♡ひああッ♡」

若い男はつんつんと箸先でその弱点を苛<sup>いじ</sup>めはじめ、たまらず腰を突き出すように跳ねさせた瞬間、

「ひあッ！♡♡♡」

ピシッ——という音とともに、尻たぶに鋭い刺激が走る。

さっきまで正面にいた中年男がいつの間にか背後にまわっていて、木の皮の鞭で少年の尻を打ってきたのだ。